

麻 遊水地の自然



機

シリーズ
野鳥
1



はじめに

麻機多目的遊水地は、巴川流域総合治水対策事業の柱の1つとして、県施行の治水(河川)事業と静岡市施行の緑地(公園)事業を導入し、5つの工区に分けて整備を進めています。

各工区の名称は、静岡北部土地改良事業(昭和38年度～48年度)の工区名を受け継いだもので、昭和50年度に第4工区、昭和53年度に第3工区に着手し、現在は第1工区の遊水地整備を進めています。

遊水地では、工事により田畠が掘り起こされ、土中に埋もれていた種子(シードバンク)から湿原性の植物などが蘇り、昆虫、野鳥、魚、両生類などの生物も戻ってきています。

また、地域活動や環境教育などを通じて多くの人々が集い、平成16年1月には県民公募の巴川流域麻機遊水地自然再生協議会が発足しました。

この協議会では、「将来にわたり安定した、人と生きものの共生」を目指し、自然再生全体構想を平成19年3月に策定し、現在は自然再生実施計画の議論を進めています。

本冊子は平成16年3月に「特定非営利活動法人麻機湿原を保全する会」との協働により発行し、今回一部修正し再発行することになりました。既刊の「麻機遊水地に蘇る生きものたち」(平成15年10月)、「麻機遊水地の自然シリーズ②植物」(平成17年3月)ともども活用していただき、遊水地に対する関心を深めていただければ幸いです。

平成19年10月

静岡県静岡土木事務所
所長 松村有二

巴川流域総合治水対策事業のご紹介

巴川の総合治水対策事業は、昭和49年(1974年)7月に発生した七夕豪雨の災害を契機に始められた流域全体で治水対策に取り組む事業です。この事業は、巴川本川の改修、大谷川放水路の建設、多目的遊水地(麻機遊水地、大内遊水地)の整備、流域内の学校、公園など公共施設への雨水貯留施設の整備が主な事業内容ですが、その他に水田への盛土規制や事業所は雨水を敷地内から川に流さないような構造の建物にするなど、行政だけでなく地域と協力して水害に強いまちづくりに取り組んでいます。総合治水対策事業が進むのに従い、流域での浸水被害も減少してきました。

麻機多目的遊水地は、もともと低地であった地理的条件を生かして、巴川が洪水の時には越流堤(堤防を低くした所)から洪水を引き込み、巴川の洪水を調節します。また、普段は公園として利用していただける多目的な施設です。平成16年10月に遊水地第3工区が完成し、5年に1度の降雨に対する安全性を確保しました。今後、さらに安全、安心して暮らしていくまちを目指して、残る遊水地(1、2、5工区)の整備等を進めていきます。

目次

はじめに

・巴川流域総合治水対策事業のご紹介	1
・麻機遊水地は野鳥の宝庫	3
・バードウォッチング(おすすめポイント)	5
・理解を深めるために(基本用語)	7
・観察力を高めるために(鳥の各部の名称)	8
・春と夏に見られる鳥	9
・秋と冬に見られる鳥	21
・一年を通して見られる鳥	43
・珍しい鳥・絶滅の恐れのある鳥	59
・麻機遊水地に出現する鳥(月別出現表)	65

凡例

- この冊子は麻機遊水地に渡来し、過去20年間に記録された200種以上の野鳥を紹介しています。
- 小学生(高学年)や初めて野鳥の観察をする方にも活用していただけるように編集しました。特に約100種は写真を付けて紹介しています。
- 3～4ページは野鳥の渡来する遊水地の現在の様子を紹介しています。
- 5～6ページは麻機遊水地を上空から撮った写真と水辺・干潟・湿地(休耕田)・草原などの土地の条件や季節によって見られそうな野鳥を紹介しています。
- 7～8ページは観察力を高められるよう野鳥について基本的な用語や鳥の各部の名称を紹介しました。
- 9～63ページは遊水地で見られる代表的な野鳥、約100種を「春と夏に見られる鳥」「秋と冬に見られる鳥」「一年を通して見られる鳥」「珍しい鳥・絶滅の恐れのある鳥」の4つに分けて紹介しています。それぞれの掲載順は日本鳥学会発行の『日本鳥類目録改訂第6版』を参考にしました。
- 65～71ページは遊水地で過去20年間に記録された野鳥を月別の「出現表」にまとめ、紹介しています。

麻機遊水地は野鳥の宝庫

静岡市の郊外にある麻機遊水地は、以前はアシやガマの繁茂する沼地でしたが、巴川を氾濫させ、大きな水害をもたらした昭和49年（1974）の七夕豪雨以後、多目的遊水地へと整備が進み現在に至っています。

遊水地事業により、開水面が増えたことによって、多くの野鳥が集まるようになりました。また、静岡県の代表的なバードウォッチングの場所として、県内はもちろんのこと、全国的にも有数な探鳥地になりました。日本野鳥の会静岡支部では毎月1回、この地で探鳥会を開催し、既に180回を超えていました。

日本では、約600種の野鳥が確認されていますが、静岡県内では390種が記録されています。遊水地では今までに200種以上が確認されており、1か所で見られた野鳥の種類としては非常に多く、自然の豊かさを証明しています。

遊水地の鳥たちの代表はなんといっても水鳥です。カワセミやバン、カイツブリ、サギ類は1年中見られますし、夏はコアジサシが渡来しオオヨシキリがさえずります。



カルガモのひな



カワセミ

春と秋の渡りの時期にはシギやチドリの仲間が羽を休めます。しかしながら遊水地は、冬が一番賑やかになる季節です。冬鳥として渡ってくるオナガガモやヒドリガモなど10種を超えるカモたちが池沼を彩ります。

ここ数年はコハクチョウも越冬しています。コウノトリが越冬し、多くのバードウォッチャーで賑わったこともありました。ただそんな賑やかなカモたちも平成10年（1998）の1600羽をピークとして、年々減少傾向にあります。

ここ数年は最盛期でも600羽ほどです。この原因は、大きくは地球規模の温暖化や環境汚染と考えられますが、遊水地では、開水面の減少がその原因の一つと考えられます。ハスやアシの繁茂による水面の減少は、泳ぎまわるカモたちにとっては住みにくくなっているようです。

人工的に改変してきた遊水地で、野鳥を含めた動植物との共生は、やはり人の手で保護、管理していく必要があります。将来にわたり遊水地が野鳥の宝庫として、また県民に親しまれる場所として保全していくために、県民の英知が必要です。

（三宅 隆）



カルガモ



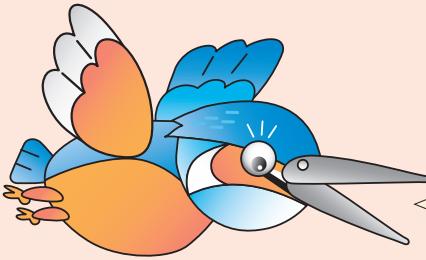
ケリ



コサギ



バードウォッチング —— おすすめポイント



ゴミは、絶対に出さないでね。
たき火もしないで。

水辺の鳥（アン原を含む）	
夏鳥（春から夏）	冬鳥（秋から冬）
・オオヨシキリ ・コヨシキリ ・ヨシゴイ ・コアジサシ ・アマサギ ・ツバメ	・カワウ ・マガモ ・コガモ ・ヒドリガモ ・オナガガモ ・ハシビロガモなど
旅鳥（春と秋）	留鳥（一年間）
・ツリスガラ ・シマアジ	・カツブリ ・アオサギ ・ダイサギ ・カワセミ ・カルガモ ・タマシギ



●平成15年10月18日 撮影

干潟・湿地（休耕田）の鳥

夏鳥（春から夏）	冬鳥（秋から冬）
・ヒクイナ ・コチドリ ・チュウサギ ・アマサギ	・コミニズク ・タゲリ ・タシギ ・クサンギ ・クイナ
旅鳥（春と秋）	留鳥（一年間）
・アオアシシギ ・キアシシギ ・ウズラシギ ・セイタカシギ ・イカルチドリなど	・タマシギ ・バン ・ケリ ・コサギ ・アオサギ

草原の鳥（田畠を含む）

夏鳥（春から夏）	冬鳥（秋から冬）
・アマサギ ・チュウサギ	・コミニズク ・チョウゲンボウ ・アオジ ・カシラダカ ・ホオジロ
旅鳥（春と秋）	留鳥（一年間）
・ムナグロ ・フクロウ ・ノビタキ	・ケリ ・セッカ ・スズメ ・ムクドリ ・キジ

疎林の鳥

夏鳥（春から夏）	冬鳥（秋から冬）
・コゲラ ・アオバズク ・アマサギ	・トラフズク ・オオタカ ・アリスイ ・ジョウビタキ
旅鳥（春と秋）	留鳥（一年間）
・カッコウ ・ツツドリ ・ホトトギス ・フクロウ	・キジ ・メジロ ・ヒヨドリ ・モズ ・ウグイス ・シジュウカラ

遊水地ご利用の際の注意点

遊水地は大雨の時には急に水位が高くなります。赤色灯やサイレンが鳴ったら速やかに退避してください。

池沼には水生植物が繁茂していて、陸と池沼の境が明確でない場所があります。水辺に近づく時は十分な注意が必要です。

また、携帯用の消毒薬や虫され、バンソウコウなどの用意をおすすめします。

上空に見られる鳥

夏鳥（春から夏）	冬鳥（秋から冬）
・ツバメ ・コシアカツバメ	・ミサゴ ・ハヤブサ ・ハイタカ
旅鳥（春と秋）	留鳥（一年間）
・アマツバメ ・ショウドウツバメ	・ヒメアマツバメ ・トビ ・ノスリ

※ここには遊水地でよく見られる鳥を環境別に掲載しています。

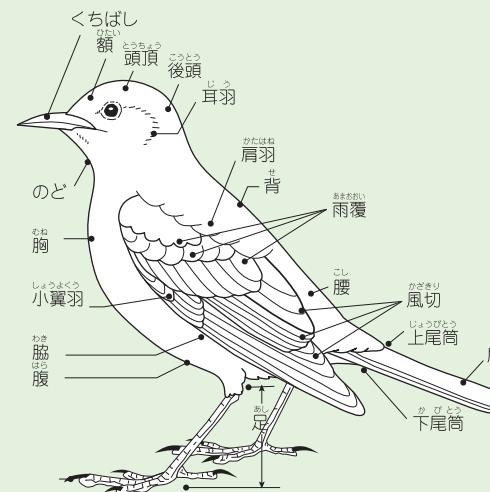
理解を深めるために——基本用語

- 雛（ひな）：卵からかえって体羽が生えそろうまでの鳥
- 幼鳥（ようちょう）：体羽が生えそろった雛で第1回目の換羽が終えるまでの鳥
- 夏羽（なつばね）：生殖羽とも言う。繁殖期か、それに先立つ、つがいのできるまでに見られる羽色。
- 冬羽（ふゆばね）：非生殖羽とも言う。繁殖期以外の羽色で、生殖羽より地味な鳥が多い。
- 留鳥（りゅうちょう）：一年中同じ地域で暮らす鳥。
- 夏鳥（なつどり）：春に南方から渡来て繁殖し、秋に越冬のため南方へ渡去する鳥。
- 冬鳥（ふゆどり）：秋に北方から渡来て越冬し、春に繁殖のため北方へ渡去する鳥。
- 旅鳥（たびどり）：北方の繁殖地と南方の越冬地を往来する途中、春または秋に立ち寄る鳥。
- 漂鳥（ひょうちょう）：国内での短い渡りをする鳥。山地や寒地で繁殖するが、低地や暖地で越冬する鳥。
- 迷鳥（めいちょう）：本来の生息地や渡りのコースから外れて渡來した鳥。
- レッドデータブック：絶滅のおそれのある野生生物の個々の種の生息状況をまとめた刊行物。最初に刊行された国際自然保護連合（IUCN）の本の表紙の色が赤だったことに由来する。環境省が発行している鳥類の最新版は『改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（鳥類編2002）』
- 静岡県レッドデータブック：静岡県内に生息・生育している動植物を保全するための基礎資料として静岡県が作成したもの。鳥類・昆虫・植物など8分類群から1,048種が取り上げられている。

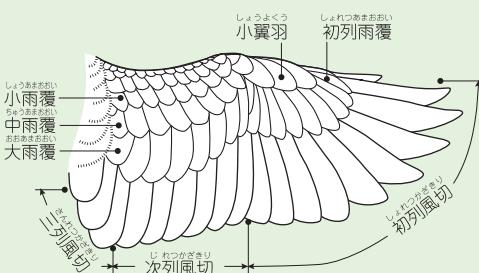
ごく基本的な
用語だよ。
覚えてね！



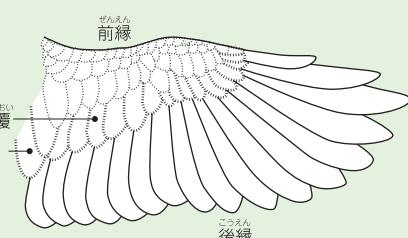
観察力を高めるために——鳥の各部の名称



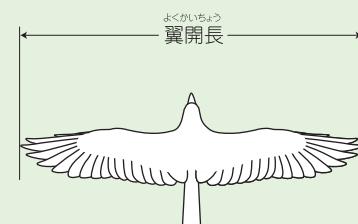
【頭部】



【翼上面】



【翼下面】



春と夏に見られる鳥



くい鳥である。外敵が近付くと首を伸ばしてアシに擬態^{ぎたい}する。アシ原をすれすれに飛ぶ姿を見ることが多い。「オーオー」と低い声で朝夕に鳴く。

麻機では夏鳥として渡来し少数ながら繁殖している。まれに越冬する。5月下旬から10月に見られる。最近はアシ原の減少とともに激減している。静岡県レッドデータブック掲載種。

アマサギ

(コウノトリ目サギ科)

全長50cm。夏羽では頭部から胸、背が橙黄色で翼は白い。
冬羽はほとんどが白くなる。
他のシラサギ類より乾いた環境を好み、カエル、バッタなどを餌とする。時にはネズミ類も捕食する。



ヨシゴイ

(コウノトリ目サギ科)

全長36cm。サギ類中最も小さい。全体に黄褐色で雄では頭頂が黒い。飛ぶと黒と黄褐色のコントラストがはっきりする。アシ原を主な生息地とする。アシに紛れて見つけにくい鳥である。外敵が近付くと首を伸ばしてアシに擬態^{ぎたい}する。アシ原をすれすれに飛ぶ姿を見ることが多い。「オーオー」と低い声で朝夕に鳴く。

麻機では夏鳥として渡来し少数ながら繁殖している。まれに越冬する。5月下旬から10月に見られる。最近はアシ原の減少とともに激減している。静岡県レッドデータブック掲載種。

チュウサギ

(コウノトリ目サギ科)

全長68cm。夏鳥として4月から10月に見られる。全身白く、くちはしと足は黒い。アマサギと同じような環境を好み、魚やカエル、バッタ類を餌とする。全国的に減少傾向にあり、環境省では準絶滅危惧種^{じゅんぜつめつき}に指定されている。



麻機では比較的普通に観察でき、休耕田などで小群が採餌している。シラサギ類では識別が難しい種であり、ダイサギと間違えやすい。くちはしの長さや色などがポイントとなる。繁殖はしていない。少数は越冬する。(ダイサギ→P 44 参照)

準絶滅危惧種^{じゅんめつき}…現時点では絶滅の危険度は小さいが生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種。



ヒクイナ

(ツル目クイナ科)

全長22cm。頭部と胸、腹部は赤褐色で、のどは白い。背は暗緑褐色で足は赤い。全国に夏鳥として渡来し繁殖している。「キョッキョッキヨッ」と連續的に鳴き、徐々にテンポが早くなる。警戒すると

「キュルキュルキュル」と鳴く。

麻機でも夏鳥として渡来し繁殖している。近年少なくなっている。5~8月の早朝や夕刻が観察に適している。まれに越冬することもある。静岡県レッドデータブック掲載種。



コチドリ

(チドリ目チドリ科)

全長16cm。頭部は白と黒の模様で、目のまわりの黄色いリングが目立つ。胸に黒い帯がある。背は淡褐色で足が黄色い。全国に夏鳥として渡来し繁殖する。「ピオピオ」と鳴いて飛び回る。

麻機でも夏鳥で繁殖している。小石がある砂礫地で営巣する。^{されきち}砂利の敷き詰めである建物の屋上で営巣した例もある。卵と雛は保護色で、じっとしているとほとんどわからない。

ムナグロ

(チドリ目チドリ科)

全長24cm。顔、のどから腹部が黒く、頭頂から背は黄褐色と黒の斑^{あら}になっている。日本には春と秋の渡りのシーズンに立ち寄る旅鳥である。干潟や河口、内陸の湿地に渡来する。「キヨビィーキヨビィー」と特徴ある声で鳴く。

麻機でも旅鳥として渡来する。春は3~5月、秋は8~10月。^{はすだ}蓮田を好み、小群で生活する。



ウズラシギ

(チドリ目シギ科)

全長21cm。頭頂が赤褐色で胸に縦斑^{じゅうはん}がある。背は黒褐色。旅鳥として全国に渡来する。

麻機では春の記録が多く、秋は少ない。静岡県レッドデータブック掲載種。





ツルシギ

(チドリ目シギ科)

全長32cm。夏羽は全体に黒く、下嘴と足は赤くなる。冬羽、幼鳥は全体に灰色をしている。全国の干潟や湿地に旅鳥として渡来する。近年減少している。

麻機でも春秋に少数が渡来する旅鳥である。静岡県レッドデータブック掲載種。

タカブシギ

(チドリ目シギ科)

全長21cm。クサシギに似ているが背の斑点が目立つ。旅鳥として全国に渡来する。内陸湿地を好み、干潟にはほとんど出ない。飛び立つときに「ピョッピョッピョッ」と鋭く鳴く。(クサシギ→P 32参照)

麻機でも旅鳥として春秋に渡来するが、近年激減している。静岡県レッドデータブック掲載種。



コアオアシシギ

(チドリ目シギ科)

全長24cm。くちばしが細長く、足の長いスマートなシギである。全体に灰色で腹部は白。全国に数少ない旅鳥として内陸湿地や干潟に渡来する。

麻機でも春秋に少数が渡来する。静岡県レッドデータブック掲載種。

キアシシギ

(チドリ目シギ科)

全長25cm。全体に灰色で、足は黄色。「ピューイ、ピューイ」と鳴く。全国の干潟や河口、内陸湿地に旅鳥として普通に渡来する。

麻機でも春秋に旅鳥として渡来する。春の方が個体数が多く、秋は少ない。





チュウシャクシギ

(チドリ目シギ科)

全長42cm。全体に淡褐色で、くちばしが下に曲がっている。旅鳥として全国の干潟や河口、内陸湿地に渡来する。「ホイピピピピピ…」と口笛のような声で鳴く。

麻機では旅鳥として渡来するが、春の記録しかない。年々渡来数が減少している。



ツバメチドリ

(チドリ目ツバメチドリ科)

全長26cm。全体に灰褐色で、くちばしの基部は赤い。翼の下面は赤褐色と黒色。飛翔時の形がツバメに似ている。全国各地で繁殖記録があるが、少ない。環境省では絶滅危惧Ⅱ類※に指定されている。

麻機では春の渡りに記録されているが、少ない。静岡県でも繁殖記録がある。



セイタカシギ

(チドリ目セイタカシギ科)

全長32cm。足が非常に長く、くちばしも長い。背は緑光沢のある黒色で他は白い。赤色の長い足が目立つ。以前は珍しい鳥だったが、最近は各地で繁殖している。

麻機では旅鳥として春秋に記録がある。干潟状の湿地や水田に渡来する。静岡県レッドデータブック掲載種。



コアジサシ

(チドリ目カモメ科)

全長28cm。頭頂は黒く、背は青灰色、くちばしと足は橙黄色。全国に夏鳥として渡来し繁殖している。埋立地や河川の中洲などで集団営巣する。河口や池沼でひらひらと舞い、停空飛翔***を繰り返し、水中にダイビングして魚を探る。環境省では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。

麻機では夏鳥として渡来する。以前は20羽前後が水面上を飛び回っていたが、近年激減している。遊水地に飛来する個体は、安倍川中流域で営巣するものが餌を採りに来ている。静岡県レッドデータブック掲載種。

絶滅危惧Ⅱ類※…絶滅の危険が増大している種。

停空飛翔***…翼と尾羽を使って、空中の一点に停止する飛び方。



アオバズク

(フクロウ目フクロウ科)

全長 27~30cm。羽角^{*}はなく胸の縦斑が目立ち、全体に茶褐色。夏鳥として全国の社寺林などに渡来し繁殖している。夜行性で蛾や甲虫類などの昆虫を主な餌とする。「ホッホー・ホッホー」と繰り返し鳴く。青葉が繁るころ渡ってくるフクロウの仲間である。

麻機ではほとんどが鳴き声の記録である。周辺から採餌に来る個体と思われる。静岡県レッドデータブック掲載種。



ツバメ

(スズメ目ツバメ科)

全長 17cm。額とどのどが赤く、頭から尾羽まで黒くて腹部は白い。全国に夏鳥として渡来し繁殖している。人家周辺に営巣する。夏から秋はアシ原などを集団でねぐらとする。

麻機でも夏鳥として渡来し、周辺で繁殖している。夕刻のねぐら入りは数千羽の大群となり見事である。近年アシ原の減少とともにねぐら入りも少ない。冬季に越冬個体が少数記録されている。

コシアカツバメ

(スズメ目ツバメ科)

全長 19cm。夏鳥。ツバメより大きく尾が長い。上面は黒く、腰が赤茶色で、のどから腹部に縦斑があり、淡橙色をしている。橋桁やビルに営巣する。渡来はツバメより遅く4月中旬である。「ジュビッ、ジュビッ」とツバメよりもごった声で鳴く。

麻機でも夏鳥として渡来し、こども病院宿舎などで少数が繁殖している。ツバメより少なく、近年減少傾向にある。静岡県レッドデータブック掲載種。



ヒレンジャク

(スズメ目レンジャク科)

全長 17cm。冠羽^{*}があり、尾羽の先端が赤色。全体に淡い褐色で、黒い過眼線が目立ち、顔は赤い。腹部の中央は黄色く、尾羽は短い。冬鳥として渡来するが、平地で見られるのは3~5月で、実のある木に群れで採餌する。「チリーチリー」と細い声で鳴く。

麻機でも3月~4月の記録が多く、ヤツデやモチノキなどの実を食べる。ヤナギの新芽にもよく飛来する。





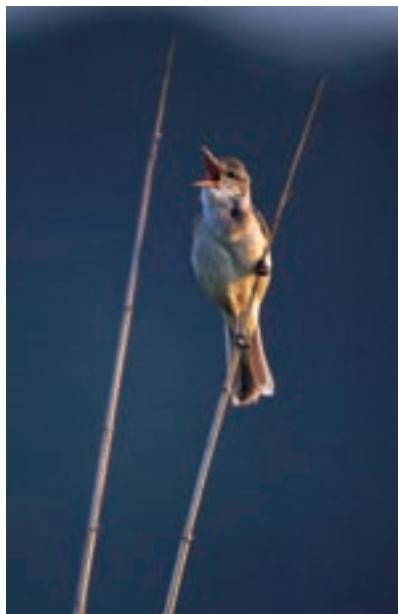
コヨシキリ

(スズメ目ウグイス科)

全長 13cm。夏鳥として全国の草原に渡来し繁殖する。全体にオリーブ褐色で眉斑は白い。「ジョッピリリ、チリリ」などと金属的な声で鳴く。「草原のジャズシンガー」と言わ

れる歌い手である。草原、アシ原の環境悪化に伴い減少している。

麻機では繁殖例もあるが、ほとんどが初夏の頃に観察される。数は多くはないが毎年見られる。秋の渡りにも少数ながら通過する。



オオヨシキリ

(スズメ目ウグイス科)

全長 18cm。夏鳥を代表する水辺の鳥。全国の川原やアシ原に渡来し繁殖している。全体にオリーブ褐色の地味な鳥だが、「ギヨギヨシ、ギヨギヨシ、ケケシ」などとぎやかに鳴く。アシ原の減少により激減している。

麻機を代表する夏鳥。4月中旬頃に渡来し繁殖している。アシ原の目立つところで盛んにさえずる。昆虫やクモ類などを餌にしている。アシ原がなければ生息できない鳥なので、アシ原を含む環境保全が必要である。

フィールドマナー

自然と人との共存を目指す自然保護団体である日本野鳥の会は、自然に親しむ際の構えとして、野鳥や自然に迷惑をかけないように、下記のようなフィールドマナーを提唱しています。

や 野外活動、無理なく楽しく。

さ 採集は控えて自然はそのままに。

し 静かに、そっと。

い 一本道、道からはずれないで。

き 気をつけよう、写真、給餌、人への迷惑。

も 持って帰ろう、思い出とゴミ。

ち 近づかないで、野鳥の巣。

マナーの基本は
や・さ・し・い
き・も・ち



双眼鏡 (7~8倍)



望遠鏡 (20~60倍)



カメラ・三脚



図鑑



ノート・筆記具



秋と冬に見られる鳥



カワウ

(ペリカン目ウ科)

全長82cm。全体に黒色で背は褐色を帯びる。くちばしの根元は黄色で、頬は白い。繁殖期には顔と下腹部に白斑が出る。潜水して魚を捕食する。全国的に増加傾向にあり、漁業被害が報告されている。

麻機では1989年より記録され、年々増加している。主として秋から冬に生息するが、最近は周年を通じて少数が見られる。繁殖はしていない。



オシドリ

(カモ目カモ科)

全長45cm。雄は派手な色合いで、橙色の銀杏羽いちょうばねが目立つ。雌は灰褐色で目のまわりが白い。樹木に囲まれた池、湖や溪流を好むが、冬には開けた水辺にも現れる。樹洞で営巣する。静岡県では、山間部のダム湖で大群が見られる。

麻機では越冬記録もあるが、秋の渡りに観察されることが多い。夏の記録は、日本平動物園の飼育個体の可能性がある。



マガモ

(カモ目カモ科)

全長59cm。雄は頭部が緑色で、くちばしは黄色、首に白い輪がある。胸は葡萄色で、背は灰白色、足は橙色である。雌は全体的に褐色で、くちばしは橙色。「グエッ、グエッ」と大きな声で鳴く。主に冬鳥として渡来するが、北日本では少数繁殖する。

麻機では200羽前後が越冬する普通種である。10月頃に渡来し、4月頃まで観察できる。毎年数羽が夏でも見られる。



銀杏羽いちょうばね…銀杏の葉形をした羽。



(左：雌 右：雄)

コガモ

(カモ目カモ科)

全長37cm。雄は頭部が栗色と緑色、背は灰色で体の中央に白い線があり、腰に三角形の黄色い斑まだらがある。雌は全体に褐色。カモ類では小型で、「ピリッ、ピリッ」と特徴のある声で鳴く。冬鳥として全国に渡来する。

麻機では秋に、最も早く渡って来るカモで、9月から4月にかけて普通に見られる。多いときには500羽前後が越冬している。



ヨシガモ

(カモ目カモ科)

全長48cm。雄の頭部は緑色と葡萄色で冠羽があり、ナポレオンの帽子のような形をしている。のどは白く、背は灰色。雌は特徴がなく、全体に褐色。冬鳥として全国に渡来する。

麻機では数少ない冬鳥。目立たないカモだが、アジアにしか分布しないため、欧米のバードウォッチャーに人気のあるカモである。

オカヨシガモ

(カモ目カモ科)

全長50cm。カモ類の雄は派手な色合いを持つ種が多いが、本種の雄は全体的に灰褐色はいかつしょくで、下尾筒かびとうの黒色が目立つ程度である。雌も全体に褐色。以前は数少ないカモだったが、近年は普通に見られる。

麻機では50羽前後が毎年越冬する。11月から3月に観察できる。



(左：雌 右：雄)

ヒドリガモ

(カモ目カモ科)

全長48cm。雄の頭頂は黄白色こうはくで顔から首は茶褐色ちゃかっしょく。背は灰白色かいはくしょくで下尾筒かびとうは黒色。雌は全体に茶褐色ちゃかっしょくでくちばしは鉛色なまりいろ。冬鳥として全国に渡来し普通に見られる。雄は「ピューン」と特徴のある声で鳴く。

麻機では最も普通に見られるカモである。多いときは300羽以上が越冬する。また、陸地によく上がり植物質の餌を探る。10月から4月に観察できる。



(左：雌 右：雄)



オナガガモ

(カモ目カモ科)

全長は雄が75cm、雌が53cm。雄の頭部はチョコレート色で首から顔の白い線が目立つ。尾が長く、名前の由来となっている。雌は全体に褐色。全国に冬鳥として渡来する普通種である。

麻機でも普通に見られ、100羽前後が越冬する。10月から3月に観察できる。



ハシビロガモ

(カモ目カモ科)

全長50cm。くちばしに特徴があるカモ。幅広く大きなくちばしを持ち、雄は緑色の頭部と腹部の茶色と、胸の白が目立つ。雌は全体に褐色。冬鳥として全国に普通に渡来する。水中のプランクトンや植物の種などを餌とする。

麻機では10月から4月に観察できる。50羽前後が越冬する。

ホシハジロ

(カモ目カモ科)

全長45cm。雄の頭部は赤褐色で背は灰白色。尾が目立たず全体に丸く見える。雌は全体に淡褐色。潜水して植物質の餌を探る。湖や池沼、内湾に大群で越冬する。

麻機では少数が越冬するのみで、大群となることはない。10月から3月に観察できる。



ミサゴ

(タカ目タカ科)

全長は雄が54cm、雌が64cm。翼が細長く、頭部と腹部が白い。尾羽が短く、飛んでいる姿がカモメ類に似ている。停空飛翔して水中にダイビングしボラなどの魚類を餌とする。全国の湖や河口などに生息し、繁殖している。環境省では準絶滅危惧種に指定されている。

麻機では9月から4月に観察できるが、秋の記録が多い。単独での渡来がほとんど。静岡県レッドデータブック掲載種。





(幼鳥)

オオタカ

(タカ目タカ科)

全長は雄が50cm、雌が56cm。成鳥は白い眉斑が明瞭で、背は青灰色で尾羽に4本の黒帯がある。胸は細かい横斑がある。幼鳥では全体に褐色で胸には縦斑がある。全国に留鳥として生息し繁殖している。環境省では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。

麻機では周年記録されているが、繁殖はしていない。秋から冬によく観察される。カモ類、ハト類、サギ類を主な餌としている。静岡県レッドデータブック掲載種。

ハヤブサ

(タカ目ハヤブサ科)

全長は雄が38cm、雌が51cm。成鳥は頬にひげ状の黒斑があり、背は黒い。胸は細かい横斑がある。幼鳥では全体に黒褐色で胸には縦斑がある。海岸の断崖などで繁殖する。冬は海岸や農耕地、河川などに生息する。飛びながらハト類やヒヨドリなどを襲う。環境省では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。

麻機では秋から冬に観察できるが、少ない。高圧線の鉄塔によくとまっていることがある。静岡県レッドデータブック掲載種。



よく鳴く。

麻機では秋から冬に観察できる。トビに次いでよく見られるタカ類である。冬には3~4羽が生息している。

ノスリ

(タカ目タカ科)

全長54cm。全体に淡褐色で腹部に黒褐色の帯がある。尾羽は開くと扇状になる。全国に留鳥として生息し、繁殖している。停空飛翔を頻繁にし、ネズミ類や昆虫類を餌とする。「ピーエー」とタカ類としては

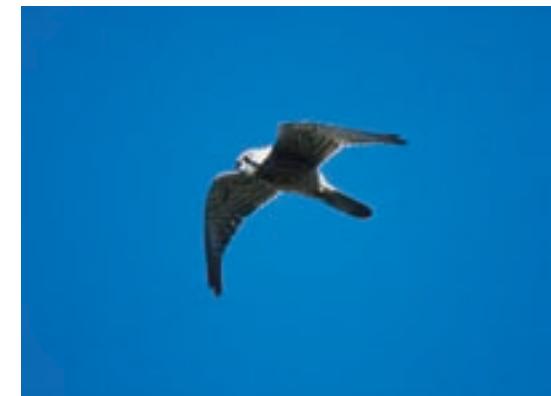
チョウゲンボウ

(タカ目ハヤブサ科)

全長は雄が30cm、雌が33cm。雄では頭部と尾羽が青灰色で、背は茶褐色で黒斑がある。胸から腹部に縦斑がある。雌は全体に茶褐色。全国に分布し中部地方以北では留鳥である。停空飛翔を頻繁に行い、

ネズミ類や昆虫類を餌とする。また、スズメやホオジロ類も襲う。

麻機では、主として秋から冬に観察できる。杭や建物、鉄塔などによくとまる。2000年には繁殖記録がある。





クイナ

(ツル目クイナ科)

全長29cm。全体に黒褐色で、
頬は灰色でくちばしは赤い。
足指が長く、飛ぶより歩いて
移動することが多い水鳥であ
る。警戒心が強く、なかなか
姿を見せない。本州中部以北
で繁殖する。静岡県ではほと

んどが冬鳥として渡来している。

麻機では10月から4月に生息し、比較的多く生息している。姿はなかなか見せ
ないが「キッキッ」と鳴く声は随所で聞かれる。静岡県レッドデータブック掲載
種。



オオバン

(ツル目クイナ科)

全長39cm。全体に黒く、く
ちばしは白い。全国に分布し
本州中部以北では繁殖をし
ている。一部九州などでも繁殖
している。「キヨンキヨン」と
かんだかい声で鳴く。水草な

どを餌とする。また、陸地にもよく上がる。

麻機では冬鳥として渡来している。近年、増加傾向にあり50羽以上が越冬して
いる。1999年と2000年には繁殖した。

イカルチドリ

(チドリ目チドリ科)

全長20cm。コチドリとほと
んど同じで一回り大きくした
チドリである。全国の河原な
どに生息し繁殖している。冬
には湿地などにも現れる。(コ
チドリ→P 11参照)

麻機では4～6月の繁殖期
を除く期間に少数渡来する。
繁殖記録はない。静岡県レッ
データブック掲載種。



タゲリ

(チドリ目チドリ科)

全長31cm。冠羽があり、背
は光沢のある緑色。胸には太
い黒帯があり、腹部は白い。
冬鳥として全国に渡来するが、
北陸地方と茨城県で繁殖した
こともある。農耕地や湿地で
昆虫などの小動物や草の実などを餌とする。「ミューミュー」と特徴ある声で鳴き、
群れで生活する。



麻機では冬鳥として10月下旬に渡来し、3月頃まで滞留する。以前は50羽以
上が越冬したが、近年は10羽前後と激減している。静岡県レッドデータブック掲
載種。



トウネン

(チドリ目シギ科)

全長 15cm。夏羽は顔から胸が朱色となる。背は黒褐色で腹部は白い。旅鳥として春と秋に干潟や内陸の湿地に多数渡来する。

麻機では秋の記録が多く、春は少ない。

アオアシシギ

(チドリ目シギ科)

全長 35cm。くちばしが少し上に反っている。全体に灰色で足は緑青色。「チヨーチヨーチヨー」と特徴ある声で鳴く。全国の干潟、河口や内陸湿地に旅鳥として渡来する。

麻機でも春秋に渡来する旅鳥。春より秋の記録が多くある。



ハマシギ

(チドリ目シギ科)

全長 21cm。くちばしが長く、夏羽では腹部が黒くなる。冬羽では全体に灰色。冬鳥または旅鳥として多数渡来する。干潟、河口、湿地で群れで行動する。

麻機では越冬記録もあるが、ほとんどが旅鳥として春秋に少数が通過する。

クサシギ

(チドリ目シギ科)

全長 24cm。全体に黒褐色で腹部が白い。飛翔時に腰と尾羽が白く目立つ。全国に冬鳥または旅鳥として渡来する。内陸湿地や河川に生息し干潟にはほとんど出ない。「チュイチュイ」などとよく飛翔時に鳴く。

麻機では冬鳥として少数渡来する。早い個体は7月に渡って来る。巴川に2～3羽が越冬する。





イソシギ

(チドリ目シギ科)

全長20cm。全体に灰褐色で
眉斑^{はいかつしょく}が白く、飛んでいる時に
翼の白帯^{ひはん}が目立つ。ギクシャクした飛び方をする。全国に
留鳥として生息し繁殖している。河原を好む。「チーリーリー」とさみしげな声で鳴く。

麻機では周年を通じて記録があるが、主として春と秋の渡りのシーズンに渡来する。近年激減している。

タシギ

(チドリ目シギ科)

全長27cm。全体に淡褐色で
複雑な模様を持ち、長い真っ直なくしばしが特徴。全国に
冬鳥として多数渡来する。足元から「ジェッ」と鳴き飛び立つことが多くある。同じ仲間のチュウジシギ、オオジシギなどとの識別は難しい。



麻機でも冬鳥として渡来する。蓮田や水田、休耕田に生息する。日中はじっとしているが、夕方から活発に活動する。



ヤマシギ

(チドリ目シギ科)

全長34cm。全体に茶褐色で
複雑な模様をしている。頭頂^{ちゃかつしょく}は黒い横斑^{おうはん}がある。全国的に
分布し繁殖するが、夜行性のため観察しにくい鳥である。
長いくしばしでミミズ類を探

る。湿地や公園、竹林など多様な環境に生息する。

麻機では冬に少数記録がある。休耕田や果樹園で観察されている。静岡県レッドデータブック掲載種。

クロハラアジサシ

(チドリ目カモ科)

全長25cm。夏羽では頭と胸から腹部が黒く、翼は黒灰色でくしばしと足は赤い。数少ない旅鳥として河口や池沼などに渡来する。水面をなめるようにして魚などの餌を探る。



麻機では旅鳥として、初夏と秋に記録がある。



トラフズク

(フクロウ目フクロウ科)

全長35~40cm。全体に、黒、白、褐色などで複雑な模様を持つ。長い羽角があり、目はオレンジ色。夜行性で、本州中部以北で繁殖し、本州以南で越冬する。社寺林などを昼間ねぐらとする。ネズミ類を主な餌とする。

麻機では冬鳥として少数が渡来するが、そのほとんどは夜の観察記録である。静岡県レッドデータブック掲載種。



フクロウ

(フクロウ目フクロウ科)

全長48～52cm。全体に黒、白、褐色で複雑な模様を持つ。留鳥として全国の山野に生息し繁殖している。夜行性でネズミ類などの小哺乳類や鳥類を餌としている。「ホツホ、ゴロッゴロッ、ポーコー」や「ウォツウォツ」と鳴く。^{えいそう} 営巣できる洞のある大木が少なくなってきたため減少している。

麻機では主に冬に記録されている。夜、
採餌に来る個体と思われる。静岡県レッド
データブック掲載種。



コミミズク

(フクロウ目フクロウ科)

全長35～41cm。トラフズクに似ているが、^{うかく}羽角が短く、目は黄色。夜行性だが昼間も活動する。冬鳥として全国の干拓地や農耕地、草原に渡来する。ネズミ類を主な餌とする。

麻機では冬鳥として渡来するが、少ない。日中も活動するため、トラフズクより観察記録は多いが、近年減少している。静岡県レッドデータブック掲載種。



ヨタ力

(ヨタ力目ヨタ力科)

麻機では秋の渡りの時期に夜間に観察されている。杭の上や道路にじっとしていることがある。9～11月の夜に観察できるが、数は少ない。静岡県レッドデータブック掲載種。



アリサイ

(キツツキ目キツツキ科)

全長 17cm。全体に黒褐色で地味なキツツキの仲間。普通の小鳥のように横枝にとまる。遠くからだとモズのような形に見える。本州北部以北で繁殖し、冬は暖地に移動する。モズに似た「クイークイーク

ィー」というような声で鳴く。アリを主な餌とする。

麻機では冬鳥として少数渡来する。樹木がある草地など好む。静岡県レッドデータブック掲載種。

ジョウビタキ

(スズメ目ツグミ科)

全長 14cm。冬鳥を代表する小鳥で全国に渡来する。雄は頭頂が灰白色で、のどが黒く、黒褐色の背には目立つ白斑があり、腹部は橙色。雌は全体に淡褐色で、背の白斑が目立つ。「ヒッヒッ、カッカッ」とおじぎするように頭を下げて鳴く。低山から農耕地や川原、公園などに飛来する。住宅地の庭でもよく見られる。

麻機では 10月～3月に生息し、遊水地周辺の畠地などに見られる。比較的、人を恐れない鳥で、静岡の地方名では「バカッチョ」「モンツキ」などと呼ばれる。



コゲラ

(キツツキ目キツツキ科)

全長 15cm。スズメ位の大きさのキツツキ。背は白と茶色の縞模様で、腹部は茶色の縦斑がある。全国に留鳥として生息し繁殖している。雑木林を代表する鳥だが、最近は市街地の公園でも営巣している。「ギィー、ギィー、キッキッキッ」などと鳴く。

麻機では数は少ないが、繁殖期に記録がある。営巣は確認されていない。



ノビタキ

(スズメ目ツグミ科)

全長 13cm。夏鳥として全国に渡来し繁殖している。夏羽の雄では頭部は黒く胸が橙色で目立つ。雌は全体に黒褐色。「ヒッヒッ、ジャッジャッ」などと鳴く。静岡県では朝霧高原などで見られるが激減している。

麻機では春と秋の渡り途中に少数が観察される。秋の方が多く見られるが、年々減少傾向にある。杭などの先端によくとまる。静岡県レッドデータブック掲載種。





ツグミ

(スズメ目ツグミ科)

全長24cm。冬鳥として全国に渡来する。全体に黒褐色で腹部は白く、黒斑がある。のどと眉斑の白色が目立つ。山地から農耕地、公園などで越冬する。「クワックワッ」と鳴く。

麻機では11月頃渡来し、4月まで越冬する。開けた環境を好み、木の実などを餌とする。春先には大群となりシベリアに渡る。普通種だが、近年激減している。

カシラダカ

(スズメ目ホオジロ科)

全長15cm。冬鳥として全国に渡来する。山地から農耕地、河原に群れで越冬する。全体に茶褐色で、短い冠羽が特徴で、白い眉斑が目立つ。地鳴きは「チッ」と一声である。

麻機でも冬鳥として、11月に渡来し3月頃まで越冬する。草地や農耕地を好み、小群で生活している。近年、減少している。



ホオアカ

(スズメ目ホオジロ科)

全長16cm。留鳥または漂鳥として全国に分布し、繁殖している。全体に茶褐色で顔の赤茶色が目立つ。ホオジロに似た声で短く鳴く。地鳴き※は「チッ」と一声である。昆虫類を主な餌としている。



麻機では、漂鳥として10月頃から4月まで少数が生息する。低い草地を好む。繁殖期の6~7月に生息したこともあるが、^{えいせう}巣の確認はされていない。

アオジ

(スズメ目ホオジロ科)

全長16cm。留鳥または漂鳥として全国に分布し、本州中部以北の山地で繁殖している。全体に緑褐色で、胸から腹部は黄色。「チョッピリィー、ピーチリリ」などと複雑な声で鳴く。地鳴きは「チッ」と一声である。

麻機では漂鳥として、10月に渡来し4月まで越冬する。^{くさやぶ}草叢を好み、農耕地などひらけた場所には出ない。





イカル

(スズメ目アトリ科)

全長23cm。留鳥または漂鳥として全国に分布し、繁殖している。頭頂は黒く、背は灰色で翼は黒い。太く黄色のくちはしが目立つ。低地から山地に生息し、冬は公園や農地にも群れで現れる。「キコキイー、キヨコキー」と鳴く。

麻機では漂鳥として1月～4月に群れで渡来する。畑地や樹木などで見られる。個体数の多い年と少ない年がある。



シメ

(スズメ目アトリ科)

全長18cm。本州中部以北の山地で繁殖し、冬は暖地に移動する。夏羽では鉛色のくちはしが目立ち、全体に茶褐色。冬羽ではくちはしが肉色になる。ずんぐりした体型で尾羽が短い。「キチッ」または「ピチッ」と鳴き、種子や木の実を餌とする。

麻機では漂鳥として10月から4月に少数が越冬する。春先には畑地などでも見られる。

カモ類の雑種



池や湖でカモ類の観察をしていると、おなじみのマガモ、カルガモ、コガモ、オナガガモ、ヒドリガモの中に“変なカモ”がいることがあります。アヒルとマガモの交雑である「アイガモ」や、マガモとカルガモの交雑の「マルガモ」であったりします。中でも一番よく目にする雑種ガモは、ヒドリガモとアメリカヒドリの交雑種です。写真を見てください。奥にいるのがヒドリガモで手前がアメリカヒドリとの雑種です。アメリカヒドリとは北米に分布するカモで日本には少数が渡来する珍しい鳥です。額から頭頂が白く、目の後方が緑色、顔が灰色で、赤褐色のヒドリガモとは区別されます。写真の個体はアメリカヒドリと言ってもよいですが、後頭部の茶褐色と顔の褐色斑にヒドリガモの特徴が出ています。

このようにカモ類は種間雑種が野外で観察されることが多い種類です。上記のほかにも、オナガガモ×トモエガモ、オナガガモ×マガモ、ホシハジロ×キンクロハジロ、コガモ×アメリカコガモなどいろいろな組み合わせが報告されています。野外で、図鑑に掲載されていない“変なカモ”を見つけたら珍鳥発見と思わず、雑種ではと疑ってみてください。カモの世界もいろいろです。





一年を通して見られる鳥



カイツブリ

(カイツブリ目カイツブリ科)

全長26cm。カイツブリ類の仲間では最小。夏羽は顔から首は赤褐色で、くちばしの根元の黄色い部分が目立つ。冬羽は全体に淡褐色、幼鳥は顔から首に黒い縞模様がある。「ケレケレケレ、ピッピッ」などと鳴く。盛んに潜水して小魚やエビ類を捕食する。

麻機では第3・4工区に周年生息し、繁殖している。巴川にもいることがある。5月から8月にかわいい雛が見られる。秋から冬は小群をつくる。

ゴイサギ

(コウノトリ目サギ科)

全長57cm。全体に灰色で、頭頂と背は黒く冠羽がある。幼鳥は全体に褐色で白い斑点があり、ホシゴイともいわれる。夜行性で、飛びながら「クワックワック」と鳴き、夜ガラスの名もある。日中は林などでじっとしている。湿地や蓮田、川、池などで魚やカエル類などを餌とする。静岡市内では日本平動物園周辺で、コサギ、アオサギと共に営巣している。麻機では周年観察できるが、繁殖はしていない。小群または単独で見られるが、時には百羽以上の大群でいることもある。最近は、減少傾向にある。原因は不明だが、県内での分散と考えられる。



ダイサギ

(コウノトリ目サギ科)

全長90cm。シラサギ類の中では最も大きい。全身白い。夏羽ではくちばしが黒く、飾り羽※が胸と背にある。冬羽ではくちばしは黄色くなる。常に水辺に生息し、魚類を主食としている。単独か数羽で生息する。

麻機では、1~2羽が秋から冬に見られる冬鳥であったが、1991年からは周年観察されるようになった。繁殖はしていない。第3・4工区に10羽前後が見られる。



飾り羽※…繁殖期に胸と背などに現れるレース状の羽。



コサギ

(コウノトリ目サギ科)

全長61cm。全身白色。くちばしと足は黒く、足指が黄色い。夏羽では冠羽、飾り羽がある。最も普通のシラサギで各地で営巣し、周年生息している。水田や川、池などで魚やカエルなどを餌する。ゴア

ーとにごった声で鳴く。

麻機では繁殖はしていないが、周年生息し普通に見られる。水辺で足指を小刻みに震わせて魚を追い出し捕食する。普通種だが、以前より減少傾向にある。

カルガモ

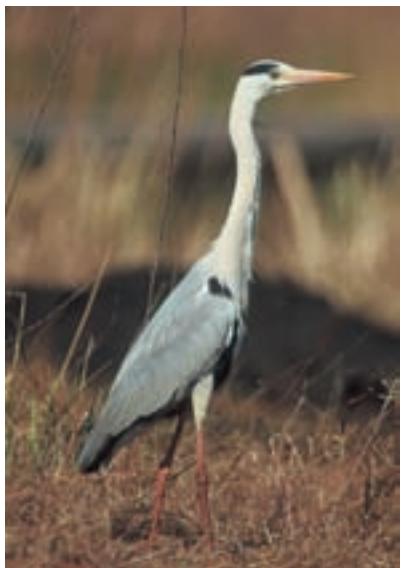
(カモ目カモ科)

全長60cm。雄雌同色。全体に褐色で、顔に2本の黒線があり、くちばしは黒く先端は黄色。全国的に留鳥として生息し繁殖している。夏に見られるカモはほとんどがこの種である。



ひなづ
ひなづ

麻機でも周年生息し、繁殖している。5～6月にかわいい雛連れが見られる。最も普通に見られるカモである。



アオサギ

(コウノトリ目サギ科)

全長93cm。日本産サギ類中、最も大きい。全体に灰色だが、翼は黒と灰色のコントラストがはっきりする。夏羽では冠羽、飾り羽があり、くちばしはピンク色となる。「キャッ」などとかんだかい声で鳴く。魚やカエルを餌としている。各地で集団営巣している。

麻機では数少ないサギだったが、最近では最も普通に観察できるサギとなっている。多いとき50羽以上が遊水地周辺で見られる。外来種のカムルチーやウシガエルなども捕食している。

トビ

(タカ目タカ科)

全長は雄が58cm、雌が68cm。全体に褐色で、三味線のバチのような凹尾が特徴的である。海岸や農耕地に留鳥として生息し繁殖している。「ピーヒョロロ」と特徴のある声で鳴く。動物の死体や魚などを餌とし、カラスとともに自然界の掃除屋といわれている。



麻機でも普通に生息している。カラスに追われている姿がよく見られる。



キジ

(キジ目キジ科)

全長は雄が80cm、雌が60cm。雄は尾が長く、派手な色彩をしている。顔は赤く、胸から腹部は緑色。雌は全体に黄褐色。繁殖期には「ケッキンケッキン」と激しく鳴き目立つ。全国に留鳥として生息し繁殖している。日本の国鳥であるが、狩猟鳥でもある。

麻機でも留鳥として繁殖している。4～6月にはよく観察でき、初夏頃にはかわいい雛連れが見られる。



タマシギ

(チドリ目タマシギ科)

全長23cm。雌が雄より美しく、巣作り・抱卵・育雛を雄が行う。一妻多夫の繁殖生態を持つ珍しい鳥である。雌雄とも目のまわりが白く、胸脇の白線が目立つ。背は褐色で黄色の線がある。雌の頬から胸は赤褐色でくちばしは長い。夕刻から雌は「コーコーコー」と盛んに鳴く。繁殖期の雌は翼を羽ばたかせ雄に盛んにディスプレイ※のダンスを披露する。本州東北南部以南で繁殖している。冬は小群で生活する。湿地の減少とともに生息地を追われている。

麻機を代表する湿地の鳥。留鳥として繁殖している。蓮田、休耕田を好みミミズなどの小動物を採餌する。蓮田などの減少に伴い減少している。静岡県レッドデータブック掲載種。



バン

(ツル目クイナ科)

全長32cm。全体に黒色で、くちばしは赤く先端が黄色い。警戒すると下尾筒の白色部が目立つ。全国に留鳥として生息し繁殖している。「クルルー」という鳴き声が笑い声に聞こえ「バンの笑い」といわれて

いる。長い足指と体全体で上手に泳ぐ。湿地を好み、蓮田などに営巣する。

麻機でも留鳥として繁殖している。田んぼの「番」をする鳥として農家に親しまれている。



ケリ

(チドリ目チドリ科)

全長35cm。大型のチドリで、頭部から胸は灰色で背は茶褐色。飛翔時、黒と白の翼模様が目立つ。着地すると田んぼと保護色となり目立たなくなる。本州に留鳥として生息し繁殖するが、分布が局地的で関東地方、西日本には少ない。河原や水田に営巣する。繁殖期は、人・犬・カラス・トビなどに激しく警戒し「キリッキリッ、キッキッ」と鳴きながら追い立てる。

麻機を代表する鳥で、全域に生息し繁殖している。4～5月に雛連れが観察できる。冬は群れで行動する。建物の屋上での営巣例がある。

ディスプレイ※…繁殖期に行われる誇示動作。



キジバト

(ハト目ハト科)

全長33cm。羽の模様がキジに似ているためキジバトと呼ばれる。首にうろこ状の特徴ある模様がある。全国の山野、農耕地、市街地に普通に生息し、繁殖している。

麻機でも留鳥として生息し、繁殖している。民家周辺や畠地でよく観察される。

カワセミ

(ブッポウソウ目カワセミ科)

全長17cm。くちばしの長い水辺を代表する鳥。コバルトルーの上面が美しく、下面是オレンジ色。全国に留鳥として生息し繁殖している。土の土手部に横穴を掘って巣とする。盛んに停空飛翔をし、水中にダイビングし魚類を捕食する。

麻機でも留鳥として生息し繁殖している。清流を代表する鳥とも言われるが、最近は汚れた水質に棲む魚も増えた関係か、環境悪化の水辺でも生息している。



ヒメアマツバメ

(アマツバメ目アマツバメ科)

全長13cm。全体に黒く、のどと腰が白い。がまがた鎌形の翼で飛^きびながら昆虫類を採餌する。巣はコシアカツバメやイワツバメの古巣を利用することが多い。関東地方以南の太平洋岸に留鳥として分布繁殖する。

北へ分布拡大中である。日本で初めて^{えいしゅう}営巣が確認されたのが静岡市であり、静岡市の鳥に指定されている。

麻機では周辺で営巣する個体が採餌に訪れる。多いときには200羽以上が群飛^{ぐんひ}する。「ジュリジュリ」と鳴きながら猛スピードで飛ぶ。夏鳥のツバメとは形は似ているが、全く別な種類である。

ヒバリ

(スズメ目ヒバリ科)

全長17cm。全体に黄褐色^{おうかっしょく}、頬は赤褐色で冠羽がある。全国に留鳥として生息し繁殖している。農耕地や河川周辺など広々とした環境を好む。「ビュルビュル」と鳴きながら、空高く舞い上がる。地上の石の上などでも盛んにさえずる。

麻機では周年生息し繁殖するが、冬は少ない。よく知られている鳥だが、近年減少している。





ハクセキレイ

(スズメ目セキレイ科)

全長21cm。頭頂から背は黒で、顔は白く、黒い過眼線がある。腹部は白い。以前は冬鳥であったが、最近は繁殖する個体が増えており、留鳥化している。盛んに尾を上下に振り水辺で昆虫などを採餌している。

ている。橋の下や建物などに集団でねぐらをとる。「チュチュン、チュチュン」と飛び立つときなどに盛んに鳴く。海岸から山間部まで多様な環境に生息し、都市部の公園などにも進出している。

麻機でも10年位前から繁殖する個体が増加し、一年中見られる。



セグロセキレイ

(スズメ目セキレイ科)

全長21cm。全体に黒く、眉斑と腹部は白い。留鳥として全国に生息し繁殖している。ほとんどを水辺で生活する。「ジュジュッ」とにごった声で鳴き「チージョイジョイ」などと複雑なさえずりをする。建物などの隙間に営巣する。以前は日本特産種だったが、近年韓国でも繁殖が確認されている。

麻機でも留鳥として生息し繁殖している。遊水地、巴川に多く見られる。

ヒヨドリ

(スズメ目ヒヨドリ科)

全長27cm。全体に灰褐色で尾の長い鳥である。波形に飛び「ピィーヨ、ピィーヨ」と盛んに鳴く。全国的に分布し繁殖している。北の地方の個体は秋に暖地に移動する。低

山から平地に生息し、雑食性で果実や昆虫、花の蜜などを採餌する。

麻機でも周年見られるが夏は少ない。周辺の山では営巣しているが、遊水地では繁殖していない。



モズ

(スズメ目モズ科)

全長20cm。全国的に分布し、北の地方の個体は秋、暖地に移動する。全体に茶褐色でくちばしが鉤状になっている。尾が長く、回すように動かす。春早くから営巣し「キーキチキチキチ」とよく鳴く。また、晩夏から初秋に「モズの高鳴き」といって鋭く鳴き、いろいろな鳥の鳴き声を上手に真似て鳴く。冬には「はやにえ」*というモズ類特異な行動をする。捕られた獲物を刺や有刺鉄線などに刺し、引きちぎって食べたりする。餌は、カエルやバッタ、クモ、魚など多様で、スズメなどの鳥類も餌とする。時には自分より大きいツグミなども採餌する。

麻機でも普通に見られ繁殖している。遊水地周辺の畠地に多く生息している。周年みられるが、夏には少なくなる。



はやにえ*…P 58 の豆知識(?)参照。



ウグイス

(スズメ目ウグイス科)

全長 15cm。全体に茶褐色で地味な色合いである。全国に分布し繁殖している。「ホー ホケキヨ」の鳴き声は誰もが知るところである。冬は「チャッチャッ」と鳴き、低山から平地に生息し庭や公園などに

も現れる。「梅にウグイス」と言われるが、なかなか姿を見せない鳥である。

麻機では10月から4月頃まで見られる。アシ原や草叢で越冬している。繁殖期には周囲の低山に移動し、鳴き声のみが聞かれる。

シジュウカラ

(スズメ目シジュウカラ科)

全長 14cm。留鳥として全国に分布し繁殖している。全体に白黒で、背は青灰色で腹部にネクタイ状に黒い縦線がある。「ツピーツピー」と軽やかに鳴く。山地から街中の公園

まで樹木の多い場所に生息し、昆虫類を主な餌としている。

麻機でも周年生息し少数は繁殖している。秋から春にアシ原などでよく観察されるが、決して多い鳥ではない。



セッカ

(スズメ目ウグイス科)

全長 12cm。小さいが、鳴き声で存在がわかる鳥。全体に黒褐色で、背と尾羽の縞模様が目立つ。「ヒッヒッヒッ」と鳴きながら上昇し「ジャッジヤッ」と下降する独特なさえずりをする。全国の川原や草

原、湿地に生息し繁殖している。

麻機でも周年生息し繁殖している。夏遅くまで鳴き声が聞こえる。冬は草叢に住みなかなか姿を見せない。

メジロ

(スズメ目メジロ科)

全長 11cm。留鳥として全国に分布し繁殖している。全体に暗黄緑色で、いわゆる「ウグイス色」をしている。眼のまわりの白いリングが目立つ。「チー・チー・チュルチュル」と早口に鳴く。ツバキやウメ、サクラの花を訪れ蜜を盛んに吸っている。山地から公園まで広く生息している。

麻機でも周年生息し少数は繁殖している。群れで活動し、樹木の多いところを好むが、アシ原にも生息する。





ホオジロ

(スズメ目ホオジロ科)

全長 16cm。留鳥として全国に分布し繁殖している。全体に茶褐色で、顔は白と黒が目立つ。農耕地や川原から山地などに広く生息している。「チヨッピリ、ピチュ、チヨッリー」などと鳴き、「一筆啓上仕り候う」や「源平つつじ、白つつじ」と聞きなしがされている。地鳴きは「チチッ」と二声である。

麻機では周年生息するが、繁殖期には少なく、冬季に多くなる。農耕地や草地に群れで生息している。



カワラヒワ

(スズメ目アトリ科)

全長 14cm。留鳥として全国に分布し繁殖している。全体にオリーブ褐色で、飛ぶと翼の黄色が目立つ。低山地から河原、農耕地に生息し「キリキリコロコロ、ジューイ」などと軽やかに鳴く。ヒマワリ

の種や木の実を主な餌としている。

麻機でも留鳥として生息し少数繁殖している。ひらけた環境を好み、冬は群れで生活している。

スズメ

(スズメ目ハタオリドリ科)

全長 14cm。留鳥として全国に分布し繁殖している。市街地から山地まで人家のある場所に生息し、建物の隙間などに巣を作る。また、ツバメの古巣や巣箱も利用する。全体に茶褐色で、頬の黒斑が目立つ。「チュン、チュン」または「チュッ、チュッ」と鳴く。冬は大群となり、農耕地などに生息する。

麻機でも留鳥として生息し繁殖している。近年、大きな群れが少なくなってきた。最も普通種といえるスズメの減少は心配される。



ムクドリ

(スズメ目ムクドリ科)

全長 24cm。留鳥として全国に分布し繁殖している。全体に黒褐色で顔に白色部がある。くちばしと足のオレンジ色が目立つ。市街地から低山に生息し、秋から冬には大群となり市街地や公園の樹木をねぐらとする。「キュルキュル」と鳴く。

麻機でも留鳥として生息し繁殖している。農耕地や芝地などでミミズや昆虫類を餌としている。





ハシボソガラス

(スズメ目カラス科)

全長50cm。留鳥として全国に分布し繁殖している。全体に紫光沢のある黒色で「ガアーガアーア」といって鳴く。海岸や河原、農耕地に多く生息している。

麻機でも留鳥として生息し繁殖している。高圧線の鉄塔などにも営巣する。^{えいそう}ハシブトガラスより個体数は少ない。



ハシブトガラス

(スズメ目カラス科)

全長56cm。留鳥として全国に分布し繁殖している。全体に紫光沢のある黒色でくちばしが太く、おでこが出っ張っている。「カーカー」などと澄んだ声で鳴く。海岸から高地まで幅広く生息している。都

会ではゴミ袋を荒らし、社会問題になっている。

麻機でも留鳥として生息し繁殖している。ハシボソガラスより多く、群れでいることが多い。

モズのはやにえ



モズ（スズメ目モズ科）は江戸時代の書「本草綱目啓蒙」^{ほんぞうこうもくけいもう}ではタカの仲間に分類されていました。形態や習性からすれば無理からぬことと思われます。その鋭いくちばし（ワシタカと同じような鉤状になっている）で、昆虫類やトカゲ、カエルやクモなどのほか、スズメなどの鳥類やネズミ、ヒミズなども餌^{えき}としています。地方名では「モズタカ」などと呼ばれています。

有刺鉄線やバラの刺^{とげ}などに、カエルやバッタが突き刺してあるのを見たことがあると思います。これを「モズのはやにえ（速費）」と言います。何のために、はやにえをたてるのかは諸説があります。

- 本能説：本能的に捕らえた獲物を突き刺してしまう。
- なわばり説：なわばりの目印とし他のモズを近づけさせないために刺しておく。
- 貯食説：食べ残した獲物を後から食べるためや、餌の少ない冬の貯食説。
- 固定説：捕らえた獲物を引き裂くために固定し、食べやすくなる。

など、いろいろな説があります。貯食説では、実際に後から食べた例や、ひからびてしまい食べなかった例、他の鳥（カラスやトビなど）が食べてしまったなどがあります。

麻機遊水地では写真のネズミのほかに、スズメ、カナヘビ、カエル類、バッタ類、コオロギ類、シオカラトンボ、モツゴ（魚）、ジョロウグモ、アメリカザリガニのはやにえを確認しています。

モズは“はやにえ”以外にも不思議な生態をもつ鳥で、他の鳥の鳴き声を上手に真似ることが知られています。そのレパートリーは幅広く、ヒバリ、オオルリ、トビ、ウグイス、オオヨシキリなどです。時には救急車のサイレンを真似たという話もあります。それもそのはずで、モズは漢字で「百舌」と書きます。さすが物まね上手です、百の舌を持っていたとは驚きです。



珍しい鳥・絶滅の恐れのある鳥



サンカノゴイ

(コウノトリ目サギ科)

全長 70 cm。全体に黒褐色で頭頂は黒い。北海道では夏鳥として繁殖している。本州以南では主に冬鳥であるが、茨城・千葉・滋賀各県では繁殖記録がある。個体数はあまり多くない。環境省では絶滅危惧 I B類※に指定されている。繁殖期には「ボォー ボォー」とうなるような声で鳴く。広いアシ原に生息し警戒心が強い鳥である。

麻機では稀な冬鳥で、1993年11月と1997年12月から1998年2月に記録がある。静岡県レッドデータブック掲載種。

アカガシラサギ

(コウノトリ目サギ科)

全長 45 cm。夏羽では頭部から胸は赤褐色で背は黒く、翼は白く冠羽がある。冬羽は全体に淡褐色で目立たない。日本では稀な旅鳥とされていたが、近年各地で繁殖が確認されている。体型はゴイサギ類に似るが、習性はシラサギ類に似ている。湿地や水田、池などで魚、カエル、バッタ類などを餌とする。

麻機では、1983年に初めて記録され、その後毎年のように5月、6月に見られた。越冬した記録もある。最近は観察されていない。

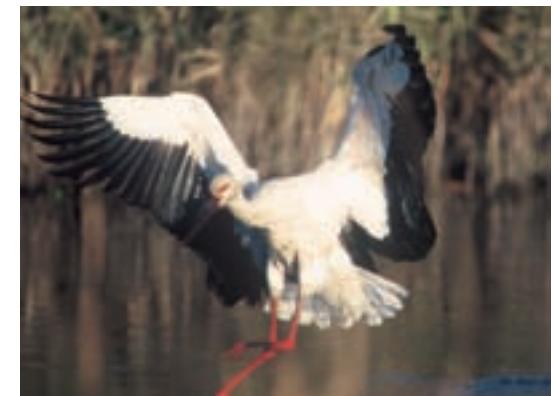


コウノトリ

(コウノトリ目コウノトリ科)

全長 112 cm。環境省では最も絶滅が心配される絶滅危惧 I A類※に指定されている。体は白く、翼は黒と白、足は淡赤色でくちはしは長く黒い。水辺で、ドジョウなどを餌とする。日本では以前、兵庫県と福井県で繁殖していたが、今では冬季に中国大陸から少数が渡来するのみである。

麻機では、1995年12月から1996年3月に1羽が越冬し、麻機遊水地が全国的に有名になった。若鳥だったので比較的近くで見ることができ、多くの観察者を喜ばせてくれた。再度の渡来が望まれる鳥である。





(中央：マガソ その他：マガモ)

マガソ

(カモ目カモ科)

全長72cm。冬鳥として東北地方から北陸地方で越冬する。全体に灰褐色でくちばしと足が橙色、くちばしの基部が白く目立つ。環境省では準絶滅危惧種に指定されている。水田や池沼に生息し、落ち穂や水草を餌としている。

麻機では、1980年と1990年（越冬）、2003年に記録がある。静岡県ではガソ類の記録は少なく、稀に観察されるのみである。



(中央：親鳥 その他：幼鳥)

コハクチョウ

(カモ目カモ科)

全長120cm。全体に白色で、くちばしは黒と黄色で、足は黒い。冬鳥として東北地方や日本海側に渡来する。越冬地では“白鳥の湖”として餉付けされて、観光地となっている。

麻機では1992年に若鳥1羽が渡來したのが初めての記録。その後、2000年冬から3年連続で、親子連れが越冬した。

ウズラ

(キジ目キジ科)

全長20cm。全体に褐色で、尾羽が短く丸い体をしている。ウズラの卵でおなじみだが野外ではなかなか姿を見ることができない鳥である。足元から急に飛び立ち、低く飛ぶ。本州中部以北で繁殖する。環境省のレッドデータブックでは情報不足※に定義されている。

麻機では秋から春の期間に記録があるが、決して多い鳥ではない。繁殖期の記録もある。静岡県レッドデータブック掲載種。



ヒメクイナ

(ツル目クイナ科)

全長19cm。本州以北では夏鳥として渡来し、少數繁殖する。他の地域では稀な旅鳥または冬鳥である。四国でも繁殖記録がある。全体に茶褐色で地味な鳥である。湿地、水田、湖沼などに生息するが、警戒心が強くななかひらけた場所には出てこない。ヒクイナに似た声で鳴くと言われるが詳しい生態は分かっていない鳥である。



麻機では1995年12月に2羽が記録されただけの迷鳥。遊水地の水草の上でクモ等を探餌しているのが観察されている。

情報不足※…情報が不足していて評価できない種。



ヤツガシラ

(ブッポウソウ目ヤツガシラ科)

全長26cm。数少ない旅鳥として全国で記録があり、長野県・岩手県・広島県で繁殖記録がある。長い冠羽があり、くちばしが長く下に曲がっている。翼は黒と白の縞模様で目立つ。「ポポポ、ポポポ」と鳴く。

麻機では稀な旅鳥で、1986年4月と2001年3月に記録されている。ケラなどを採餌している。



ツリスガラ

(スズメ目ツリスガラ科)

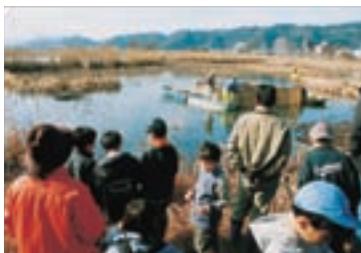
全長11cm。頭は灰色で、白い眉斑と黒い過眼線が目立つ。アシの茎に縦にとまり、中の虫を餌としている。稀な冬鳥とされていたが、近年は関東地方まで分布を広げ、西南日本では普通種となっている。

麻機では稀な旅鳥として、春と秋に記録されている。アシ原でメジロに似た「チーチィー」と細い声で鳴く。



自然に親しう。
自然に学ぶ。
自然を守る。

麻機遊水地トピックス



▲伝統漁法 柴揚げ(しばあげ)漁



▲水辺の観察会



▲ホテイアオイの除草作戦



▲ヤナギの森づくり



▲田んぼづくり



▲自然観察学習



▲クリーン作戦

麻機遊水地に出現する鳥・月別出現表

作成：伴野正志

この表は、2003年12月までの過去20年間の観察記録を整理し、まとめたものです。

この表を作成する上で一番悩んだのが、生息状況の欄です。本来、夏鳥のヨシゴイやアマサギ、チュウサギ、ツバメなどの種でも、20年の間には冬の記録があり、表の中では「留鳥」になってしまうので「●」と「○」で区別しました。冬鳥のカモ類などでも同様に区別してあります。「普通」「少」「稀」「極稀」の表記はあくまでも筆者の判断ですのでご了承下さい。「留鳥」「冬鳥」の渡りの表記も同様です。どうしても判断できない種については「空白」としてあります。中には「?」マークが付く種もあると思いますが、20年観察しても“まだまだ”ということです。

なお、鳥の配列（掲載順）は「日本鳥類目録改訂第6版（日本鳥学会2000）」によっています。

《表の見方》

- ：姿認記録（しにんきろく）
- ：本来の生息時期でない姿認記録
- ◎：鳴き声の記録
- 多：ごく普通に観察できる種
- 普通：普通に観察できる種

- 少：普通に観察できるが少ない種
- 稀(まれ)：年によって観察できる種
- 極稀（ごくまれ）：1～2例しか記録がない種
- 通過：麻機では春秋の渡りの時期に出現する種

※生息状況の「空白」は、不定期な記録のため断定できない種です。

※表中の太目の仕切り線は、目科の境目です。

種名	出現月	生息状況												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
カイツブリ P 43		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
ハジロカイツブリ		●								●	●	●	冬鳥 稀	
アカエリカイツブリ									●				通過 極稀	
カンムリカイツブリ		●			●				●	●	●		冬鳥 少	
カワウ P 21		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	普通	
サンカノゴイ P 59		●	●							●	●		冬鳥 稀	
ヨシゴイ P 9		○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	○	夏鳥 少	
オオヨシゴイ				●	●	●							極稀	
ゴイサギ P 44		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
ササゴイ					●	●	●	●	●	●			通過 少	
種名	出現月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生息状況

種名	出現月	生息状況												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生息状況
アカガシラサギ P 60		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	通過 少
アマサギ P 10	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	夏鳥 普通
ダイサギ P 44	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 少
チュウサギ P 10	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	夏鳥 普通
コサギ P 45	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通
アオサギ P 45	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通
ムラサキサギ											●			迷鳥 極稀
コウノトリ P 60	●	●	●									●		迷鳥 極稀
コクガン			●											冬鳥 極稀
マガニ P 61	●	●	●									●	●	冬鳥 極稀
コハクチョウ P 61	●	●	●									●	●	冬鳥 稀
オシドリ P 22	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	●	●	冬鳥 少
マガモ P 22	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	●	●	冬鳥 普通
カルガモ P 46	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通
コガモ P 23	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	●	●	●	冬鳥 普通
(アメリカコガモ)	●	●	●	●	●	●	●	●				●		冬鳥 稀
トモエガモ	●	●	●									●	●	冬鳥 少
ヨシガモ P 23	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●	冬鳥 少
オカヨシガモ P 24	●	●	●	●	●	●	●	●	○			●	●	冬鳥 普通
ヒドリガモ P 24	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	●	●	冬鳥 普通
アメリカヒドリ	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●	冬鳥 稀
オナガガモ P 25	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	●	●	冬鳥 普通
シマアジ												●	●	旅鳥 少
ハシビロガモ P 25	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	●	●	冬鳥 普通
ホシハジロ P 26	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●	冬鳥 少
キンクロハジロ	●	●	●	●	●	●	●	●		○	●	●	●	冬鳥 少
スズガモ	●	●	●	●							●	●	●	冬鳥 少
ホオジロガモ												●	●	冬鳥 稀
ミコアイサ	●											●	●	冬鳥 稀
カワアイサ												●	●	冬鳥 稀
ミサゴ P 26	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	少
ハチクマ														通過 少
トビ P 46	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通
オオワシ	●													極稀
種名	出現月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生息状況

種名	出現月	生息状況												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
オオタカ P 27		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
ツミ														
ハイタカ		●	●	●	●	●								
ノスリ P 27		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
サシバ				●	●	●								
クマタカ														
イヌワシ		●		●										
ハイイロチュウヒ			●											
チュウヒ				●										
ハヤブサ P 28		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
チゴハヤブサ														
コチョウゲンボウ		●	●	●	●									
チョウゲンボウ P 28		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
ウズラ P 62		●	●	●	●		●							
コジュケイ*		●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
キジ P 47		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
クイナ P 29		●	●	●	●	●	○	○						
ヒメクイナ P 62														
ヒクイナ P 11		○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	
シマクイナ		●		●										
シロハラクイナ				●	●	●								
バン P 47		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
ツルクイナ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
オオバン P 29		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
レンカク									●					
タマシギ P 48		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
ハジロコチドリ			●	●	●									
コチドリ P 11		○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
イカルチドリ P 30		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
シロチドリ														
メダイチドリ														
ムナグロ P 12		○	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	
ケリ P 48		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
タケリ P 30		●	●	●	●									
種名	出現月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生息状況

※コジュケイは、日本鳥類目録改訂第6版では外来種となった。

種名	出現月	生息状況												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
キヨウジョシギ				●	●		●							
トウネン P 31					●	●			●	●	●	●		
ヒバリシギ						●	●							
オジロトウネン						●								
アメリカカウズラシギ														
ウズラシギ P 12						●	●							
ハマシギ P 31		●	●	●	●	●			●	●	●	●		
サルハマシギ						●								
エリマキシギ						●	●							
ツルシギ P 13		●	●	●	●	●			●	●	●	●		
コアオアシシギ P 13						●			●	●	●	●		
アオアシシギ P 32						●	●		●	●	●	●		
クサシギ P 32		●	●	●	●	●			●	●	●	●		
タカブシギ P 14			●		●	●			●	●	●	●		
キアシシギ P 14						●	●		●	●	●	●		
イソシギ P 33		●	●	●	●	●			●	●	●	●		
ソリハシシギ						●			●	●	●	●		
オグロシギ								●						
ダイシャクシギ		●												
チュウシャクシギ P 15					●	●	●	●						
コシャクシギ						●								
ヤマシギ P 33		●	●	●										
タシギ P 34		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
チュウジシギ						●								
オオジシギ						●	●	●	●	●	●	●		
ジシギ類*						●	●	●	●	●	●	●		
セイタカシギ P 15						●	●	●	●	●	●	●		
ツバメチドリ P 16						●	●	●						
アカエリヒレアシシギ							●							
ユリカモメ		●	●	●					●	●	●	●		
ハジロクロハラアジサシ						●								
クロハラアジサシ P 34						●	●	●	●	●	●	●		
アジサシ							●	●	●	●	●	●		
コアジサシ P 16						●	●	●	●	●	●	●		
種名	出現月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生息状況

※ハリオシギ、チュウジシギ、オオジシギのいずれであるのか判別できなかったので「ジシギ類」とした。

※種名右の数字は、写真付きで紹介している頁番号です。

種名	出現月	生息状況												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
キジバト P 49		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
アオバト			●	●	●	●	●		●					
ジュウイチ				○										
カッコウ					●	●	●	●	●					
ツツドリ					●	○	○			●	●			
ホトトギス					●	○	●	●	●					
トラフズク P 35		●	●	●						●	●	●	●	
コミニズク P 35		●	●	●	●					●	●	●	●	
オオコノハズク						○				●	●	●	●	
アオバズク P 17						●	○		●	●	●	●		
フクロウ P 36		●	●	●		○				●	●	●		
ヨタカ P 36									●	●	●	●		
ハリオアマツバメ						●								
ヒメアマツバメ P 49		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
アマツバメ		○												
ヤマセミ		●					●		●					
カワセミ P 50		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
ヤツガシラ P 63			●	●	●									
アリスイ P 37		●	●	●	●				●	●	●	●		
アオゲラ		●	○	○	●	●	●	○	●	○	●	●	○	
アカゲラ		●	●	●	●					●				
コゲラ P 37		●			●	●	●	○	●					
ヒメコウテンシ					●									
ヒバリ P 50		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
ショウドウツバメ				●										
ツバメ P 17		○	○	●	●	●	●	●	●	●	○	夏鳥	普通	
コシアカツバメ P 18												夏鳥	普通	
イワツバメ		○	○	●	●	●	●	●	●	●	○	夏鳥	少	
ツメナガセキレイ						●						旅鳥	極稀	
キセキレイ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥	少	
ハクセキレイ P 51		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥	普通	
(ホオジロハクセキレイ)			●										極稀	
セグロセキレイ P 51		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥	普通	
ピンズイ		●	●	●	●	●						通過	少	
種名	出現月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生息状況

※種名右の数字は、写真付きで紹介している頁番号です。

種名	出現月	生息状況												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
タヒバリ		●	●	●	●	●								
ヒヨドリ P 52		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
モズ P 52		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
アカモズ								●					通過 少	
キレンジャク		●	●	●									冬鳥 稀	
ヒレンジャク P 18		●	●	●	●	●							冬鳥 少	
ノゴマ							●						通過 稀	
ルリビタキ			●	○									冬鳥 稀	
ジョウビタキ P 38		●	●	●	●								冬鳥 少	
ノビタキ P 38					●	●	●						通過 少	
イソヒヨドリ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	少	
トラツグミ		●	●	●			●						少	
クロツグミ						●							通過 稀	
アカハラ		●	●	●	●							●	冬鳥 少	
シロハラ		●	●	●	●							●	冬鳥 少	
ツグミ P 39		●	●	●	●	●	●					●	冬鳥 普通	
ウグイス P 53		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
オオセッカ				●	●								通過 極稀	
シマセンニユウ								●					通過 極稀	
コヨシキリ P 19						●	●	●	●	●	●	●	通過 少	
オオヨシキリ P 19						●	●	●	●	●	●	●	夏鳥 普通	
メボソムシクイ						●							通過 極稀	
センダイムシクイ						●							通過 稀	
セッカ P 53		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
コサメビタキ									●				通過 極稀	
サンコウチョウ							●	●					通過 極稀	
エナガ		●	●	●	●	●						●	少	
ツリスガラ P 63			●	●						●	●		通過 少	
コガラ												●	極稀	
ヤマガラ		●	●	●	●	●	●					●	少	
シジュウカラ P 54		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 少	
メジロ P 54		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 少	
ホオジロ P 55		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
コジュリン		●	●	●						●	●		通過 少	
種名	出現月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生息状況

※種名右の数字は、写真付きで紹介している頁番号です。

種名	出現月	生息状況												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
ホオアカ	P 39	●	●	●	●	●	○	○		●	●	●	冬鳥 少	
カシラダカ	P 40	●	●	●	●	●				●	●	●	冬鳥 普通	
コホオアカ		●	●	●	●					●			冬鳥 極稀	
ミヤマホオジロ										●			冬鳥 極稀	
ノジコ				●	●					●	●		通過 稀	
アオジ	P 40	●	●	●	●	●				●	●	●	冬鳥 普通	
クロジ										●			極稀	
オオジュリン		●	●	●	●					●	●	●	冬鳥 少	
アトリ		●	●	●	●					●	●	●	冬鳥 稀	
カワラヒワ	P 55	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
マヒワ			●										冬鳥 極稀	
ベニマシコ		●		●						●	●	●	冬鳥 稀	
コイカル		●	●	●	●					●	●	●	冬鳥 稀	
イカル	P 41	●	●	●	●	●	○	●		●	●	●	普通	
シメ	P 41	●	●	●	●	●				●	●	●	冬鳥 少	
ニュウナイスズメ				●						●	●	●	通過 少	
スズメ	P 56	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
コムクドリ					●	●		●	●	●	●		通過 少	
カラムクドリ										●	●	●	通過 極稀	
ムクドリ	P 56	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
カケス		●	●	●	●	○							少	
オナガ						●	●						稀	
ハシボソガラス	P 57	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
ハシブトガラス	P 57	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留鳥 普通	
種名	出現月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生息状況



鳥名索引

※写真付きで紹介した鳥のみ掲載

ア

- アオアシシギ 32
- アオサギ 45
- アオジ 40
- アオバズク 17
- アカガシラサギ 60
- アマサギ 10
- アメリカヒドリ(雑種) 42
- アリスイ 37
- イカル 41
- イカルチドリ 30
- イソシギ 33
- ウグイス 53
- ウズラ 62
- ウズラシギ 12
- オオタカ 27
- オオバン 29
- オオヨシキリ 19
- オカヨシガモ 24
- オシドリ 22
- オナガガモ 25

サ

- サンカノゴイ 59
- シジュウカラ 54
- シメ 41
- ジョウビタキ 38
- スズメ 56
- セイタカシギ 15
- セグロセキレイ 51
- セッカ 53

タ

- ダイサギ 44
- タカブシギ 14
- タゲリ 30
- タシギ 34
- タマシギ 48
- チュウサギ 10
- チュウシャクシギ 15
- チョウゲンボウ 28
- ツグミ 39
- カワラヒワ 55
- キアシシギ 14
- キジ 47
- キジバト 49
- クイナ 29
- クサシギ 32
- クロハラアジサシ 34
- ケリ 448
- コアオアシシギ 13
- コアジサシ 16
- ゴイサギ 44
- コウノトリ 60

ハ

- ハクセキレイ 51
- ハシビロガモ 25
- ハシブトガラス 57
- ハシボソガラス 57
- ハマシギ 31
- ハヤブサ 28
- バン 47
- ヒクイナ 11
- ヒドリガモ 24・42
- ヒバリ 50
- ヒメアマツバメ 49
- ヒメクイナ 62
- ヒヨドリ 52
- ピレンジャク 18
- フクロウ 36
- ホオアカ 39
- ホオジロ 55
- ホシハジロ 26

マ

- ダイサギ 44
- タカブシギ 14
- タゲリ 30
- タシギ 34
- タマシギ 48
- チュウサギ 10
- ムクドリ 56
- ムナグロ 12
- メジロ 54
- モズ 52・58

ヤ

- ヤツガシラ 63
- ヤマシギ 33
- ヨシガモ 23
- ヨシゴイ 9
- ヨタカ 36

ナ

- ノスリ 27
- ノビタキ 38

参考文献

- ・叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄：『山渓ハンディ図鑑7日本の野鳥』（山と渓谷社・東京1998）
- ・高野伸二：『フィールドガイド日本の野鳥』（日本野鳥の会・東京1982）
- ・日本鳥学会：『日本鳥類目録改訂第6版』（日本鳥学会・帯広2000）
- ・真木広造・大西敏一：『決定版日本の野鳥590』（平凡社・東京2000）
- ・静岡の鳥編集委員会：『静岡県の鳥類』（静岡県環境部自然保護課・静岡1998）
- ・静岡の鳥編集委員会：『しづおかの鳥』（静岡県環境部自然保護課・静岡1998）
- ・静岡県立自然史博物館設立推進協議会（編）：『しづおか自然図鑑』（静岡新聞社・静岡2001）
- ・日本野鳥の会静岡支部：『野鳥だよりNo.300』（日本野鳥の会静岡支部・静岡2003）

あなたも参加しませんか 麻機遊水地の探鳥会

日 時	毎月第4曜日（雨天中止） 午前9時30分～11時30分
集合場所	第4工区の巴川と七曲川の合流点（県立こども病院の西側）
参加費用	無料
申し込み	不要
連絡先	（財）日本野鳥の会 静岡支部（TEL 054-208-5466） 担当者 飯塚久志 後藤俊一



制作スタッフ

特定非営利活動法人 麻機湿原を保全する会

監修 三宅隆
野鳥の解説文 伴野正志
写真 飯塚久志、小池正明、後藤俊一、伴野正志
事務局 鈴木和喜

特定非営利活動法人 麻機湿原を保全する会

私たちは麻機遊水地を拠点に「生きものと地域の関わりを大切にした活動や行政とも連携した活動を目指しています。

《主な活動》

・生きものを大切にした活動

長年遊水地を中心に動植物の観察活動をしている会員が中心になって、ヤナギの森づくりやクリーン作戦を行い、生きものの住みやすい環境づくりを行っています。

・地域との関わりを大切にした活動

昔から湿原であったこの地域を開墾し、稻作や池沼で伝統漁（柴あげ）など農村文化を育んできた人たちから、昔の様子を聞いたり、田んぼを復元するなどの活動を行っています。

・自然環境教育への支援活動

生きものや地域の文化にくわしい会員を「自然環境レンジャー」に認定し、小学校の総合学習や町内会の観察会に派遣しています。

麻機遊水地の自然 ーシリーズ①野鳥ー

発行：静岡県静岡土木事務所（河川改良課）

〒422-8031 静岡市駿河区有明町2-20

TEL 054-286-9363 FAX 054-286-9398

〈静岡土木事務所ホームページ：ともえ川（ともえランド）〉

<http://doboku.pref.shizuoka.jp/desaki2/shizuoka/>

制作：特定非営利活動法人 麻機湿原を保全する会

事務局 〒420-0961 静岡市葵区北141-1

TEL 054-247-4905

遊水地利用上のご注意



大雨により河川の水位が上昇して水が遊水地に流れ込む危険があると回転灯 が回ります。また周辺の河川から水が遊水地に流れ込む直前にはスピーカー からサイレンが鳴ります。回転灯が回ったり、サイレンが鳴ったら、危険ですので、すぐに遊水地の外に出てください。

バスのご利用（新静岡バス停から）

- 13番のりば（西バスホーム）で「国立療養所・静岡神経医療センター」行（こども病院線）に乗車
- 16番のりば（西バスホーム）で「麻機」行、もしくは「麻機北」行（大浜麻機線）に乗車



いっしょに、未来の地域づくり。
New Public Engineering for SHIZUOKA

静岡県建設部